

市民の人権意識を高めよう」と、昨年四月から一年間、南国市が法務省人権擁護局と全国人権擁護委員連合会から「人権モデル地区」に指定され、人権意識調査や講演会、映画会など幅広い啓発活動を行いました。

今回から二回にわたって、啓発活動の一環として中学生から募集した人権作文三点を紹介いたします。

部落差別について

鸛ヶ池中学校3年 吉岡佳代

私は、被差別部落に生まれ、今まで育ってきました。だから当然のように、同和学習も受けてきました。けれども、身についたのは知識だけで、実際に差別を受けても、自分自身、ピンとこずに、力のなさを教えられることもありました。

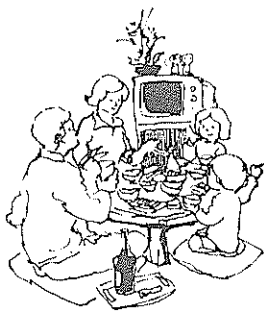
その私が、近ごろ、部落差別というものを、すこく身近に感じるようになったのです。なぜなら、私は今年、卒業を迎えるからです。

この夏、私は、部落解放子供会リーダー研修会に参加しました。いろんな人たちが、私たちに話をしてくれました。そして、私は、おかしなことに気づきました。大人の人たちは、部落差別の話を涙を流しながら、語ってくれます。けれど、私には、その憤りが伝わってこないのです。感じる事ができなかつたのです。すると、誰かが言いました。

「君らは、なぜ、腹が立たんのか？」

（そんなこと言ったって、腹が立たないものは立たないのだから、仕方がないやんか。まだ、学習も浅いのに、無理なことを言うて、私はこんなことを思っていました。）

私たちの学校は、どちらかというと、部落の生徒の方が多いのです。同和学習を通して、学校全体が「部落差別を許してはいけない」という雰囲気なので、差別がなく、あたりまえなのです。今までずっと、こんな中で生活してきているのに、急に現実をぶつけられても困る。——それが私の考えでした。それに対して、父は、こう話しました。「確かに、閉いの中にいれば、部落差別に気づきにくくなるだろう。けれども、それに関係なく、人間は初めから「けしからん」と思う心を持っている。どんな事を「けしからん」と思うのか、そこに、腹が立つ、立たないの差がある。



い違いがある。それから考えると、お前はその気持ちで足らんよらだ」

人間として、基本的な、部落問題以前に、持つべき「心」が欠けていたのです。

私は、このまま社会に出ていくのが怖くなりました。部落に生まれて、十五年目を迎えるようになって、まだ何もわかっていないのです。それなのに、これから大きな壁を越えなくてはならないなんて。解放への道が、グント、遠ざかるような気がしました。

しかし、だからといって、足踏みしているわけにはいかないのです。あと、もう何カ月かたてば、私たちは、一人一人が別の道を歩き始めます。ですから、今の大きな社会を相手に、闘っていきけるほどの能力を、備えて、団結しなければならぬのです。

けれども、部落差別から逃げた、自分のこととして考えていない人などがいます。この差別から

は、どうやって逃れることはできないのです。その現実を、しっかりと受けとめなくてはならないと思います。そして今こそ、立ち上がらなくてはならないのです。

だんだん、年月がたつにつれて、差別の本当の苦しさを味わってきた人々が、少なくなってきました。現在、特別措置法などによって、地区の状態も、だいぶ変わって、部落差別に気づきにくくなりました。けれどもまだ差別は、根強く生き続けているのです。しかも、一緒に同和教育を受けてきた仲間だと信じていた人たちまでが、ひどい差別を、平気でするようになってしまったのです。人の心というものは、それぞれ違った考えを持っていますが、これから、私たちが、生まれてくる子供たちのためにも、その一つ一つと闘い、闘得していかなくてはなりません。それが私たち、部落に生まれた者の使命なのです。私は、差別におされることなく、卒業を機会に、大きくはばたいいきたいと思えます。

南同研大会

わたしの出合った子供たち

徳島県阿波中学校 藤原スミ先生

同和教育を全市民のものに——をスローガンに、今年も第十八回南国市同和教育研究会が十月十五日、市民体育館を主会場に約六百五十人が参加し開かれました。午前の全体会では、徳島県阿波中学校の藤原スミ先生が「わたしの出合った子供たち」と題して講演。午後からは十三の分科会に分かれ熱心に話し合いました。今回は、全体会の講演について紹介します。

果たして、私たちは今苦しんでいる子供たちを、先生を本当に必要としている子供たちを、教育の主人公に据えているでしょうか。教育とは、子供を幸福にするというところから出発しなければならぬと思うのです。差別に抗して生きる親や子供から、本当の人間の生き方を学ぶのです。差別を残してきた、差別に取りつかれ、現実を見失っている自分自身の人間性を取り戻すことが、本当の人間の姿ではないでしょうか。

柳の枝のように、揺れ動く子供たちの心をしっかりと支え、部落差別の中に生きてゆかなければならない。子供たちの願いに誠実に答えていかなければなりません。

教師として当たり前のことです。よく、部落を抱える中学校への転任者へ「気をつけなさいよ」と言うのです。私は腹が立ちます。それは真実を知らない人が言うのです。子供を管理し、その命令に従わないのは悪い人なんだという見方しかできない先生は、怖い学校と云うでしょう。それは、人間の真実を見抜く力を子供たちが持っているからです。

子供たちの本当の姿を見るために、私は地区へ何回も何回も足を運びました。そこで出会った子供たちから、そのお母さんから、私は人間の生き方を教わりました。私を人間に近づけてくれた一人に、長欠生B君がいました。その

子を学校に來させようと、私は必死でした。訪ねていったB君のお母さんは「私が勝手に休ませよらんやけん、放つて」と言うのです。怒られても何回も家を訪ねているうち、お母さんはボツリ、ボツリと、差別の重みを語り始めました。「小学校一年のとき、十日しか学行に行けただけ、文字が書けんのや。この子がいなかつたら、病院で受け付けできんけん——。そして私はB君を修学旅行に行かせるのに必死でした。お母さんの病気の具合を聞き、「今のところは心配ない」ということで、B君は旅行に行くことができました。

あるとき、B君は言いました。

「ぼくのようなダニのような人間を、なぜ心配するね」そして「先生、はよう帰りや。子供が待つちようよ」と、自分のことより私の子供のことを心配しているのです。もし、子供の本当の願いを知らなかつたら、B君をただの非行少年として扱っていたかも知れないのです。悪いと言われた生徒から学んだものは、本当の人間の生き方です。いつも目をみはるような本物の心を見せてくれました。この子たちと出合っていなかつたら、私は外側ばかりで人を判断する、教師になつていただろうと思えます。

「ぼくのようなダニのような人間を、なぜ心配するね」というものを、変えることはできるのです。同和教育を他人事のように考えている人も、よい方向へきつと変えられるはず。よい方向へ変えていくのも、人間の力だと思えます。

同和教育の学習を深めていく中で、仲間が堅いきずなで結ばれていくのを、私は感じます。子供たちの家の人がこう言いました。「同和教育はどうでもよいと言っていた私ですが、子供の話の仲間入りさせてもらえないのがつらいです。これからは、私も勉強します」。

子供たちが変つたら、親が変わっていきなす。そして、子と親と教師がしっかりと手を結び合つて人間としてつながり合っていくのです。



私のクラスの一人はこう言いました。「水のような心で学校に來ているぼくは、ピッケルで割られてしまふと変形したままで心が満たされぬ。もし、ぼくが悪いことをしても、ぼくの心の中の氷を回りから溶かしてくれような、温かさを持った先生を尊敬する」。

時間はかかってもいいと思えます。その子のよいところを少しずつ見つけ、それをクラスの中に出してゆき共に学んでいく。教師もクラスの一人なのです。